

『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.14

May.2023

— Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 授学無学人記品第九』 (述門・正宗分)

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜

せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習学せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』) (法師品 二〇九頁三行)

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくこ

とを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



《五百弟子受記品の復習》

・雄弁と勇氣の人 富樓那 (P16・終2行/P12・3行)

・貪着は拔出せよ (P24・終2行/P18・1行)

欲望を自己完成(自利)のためと、社会向上(利他)のためのよいエネルギーに転化しさえすれば、自然に、欲望への貪りや執着から起こる(悪)は雲散霧消(うんさんむしょう)してしまうのです。

『衆生處處の貪着を拔出したもう』 (一八三頁 終四行)

『唯佛世尊のみ能く我等が深心の本願を知しめせり』 (一八三頁 終三行)

・正法にもとづく説得力 (P29・5行/P21・9行)

どのような弁舌も、雄弁も、正しい法にもとづくものでなければならないということです。

・わかりやすいことばを使う (P32・5行/P23・9行)

〈相手にとっていちばんわかりやすいことばを使う〉ということです。

・雄弁を養うのは沈黙

(P35・6行/P25・終6行)

ただペラペラしゃべるのが雄弁ではなく、必要なことだけを完全に、最高の効果をあげるように話すのが真の雄弁です。～ 釈尊は～ 必要なときにだけ、必要なことだけをお話しになりました。

・空法

(P40・終3行/P29・終3行)

「空」ということを簡単にいえば、「この世の全てのものには、他から独立してそれだけで存在し、かつ永遠に変わることのないような本体、『我』というものはない」(諸法無我)というのです。そして「全ては因縁によって生じ、滅する」のが(因縁生起・諸行無常)、全てのものごとの『実相』だというのです。(すべての存在はただ一つ、同じ存在である)

そこから「万人・万物は平等であり、仏の慈悲によって生かされて常に大調和しているものである」という仏教の世界観・人生観が生まれるのです。

・四無礙智

(P41・終3行/P30・8行)

法(ほう)無礙智 — 教えの根本である真理に滞りなく通達していること。

義(ぎ)無礙智 — 教えの内容・意味を滞りなく知り尽くしていること

辞(じ)無礙智 — 教えを説くのに、適切なことばを自由自在に駆使できること。

楽説(ぎょうせつ)無礙智 — 以上の智慧をもち、常に自ら進んで自由自在に法を説く。

・富樓那の半歩主義

(P45・4行/P33・4行)

『人・天交接して兩つながら相見ることを得ん』 (一八五頁 終三行)

仏教を心底から理解し、それに帰依すれば、～ 煩悩ではなくなってしまうわけです。

— すべての欲望がそのまま「清らかな欲望」になるのです。(P57・終4行/P42・終6行)

『飛行自在ならん』 (一八五頁 終行)

(P63・終4行/P47・1行)

現象の変化へのとらわれから離れて、自由自在な仏の境地に達したということです。(「我がこだわり・とらわれ」がなくなった状態)

・法喜食・禅悦食

(P64・4行/P47・終4行)

◎「法喜食」法を聞く喜び ◎「禅悦食」法を修行する喜び

『内に菩薩の行を秘し 外に是れ聲聞なりと現ず』 (一八七頁 三行)

・人間として現れる菩薩

(P79・終3行/P60・1行)

『衆に三毒ありと示し 又邪見の相を現ず～ 種種の現化の事を説かば 衆生の是れを聞かん者 心に則ち疑惑を懐かん』』 (一八七頁四行)

・愚者にして悟った周陀

(P105・6行/P79・終4行)

・衣裏繫珠の譬え

(P123・7行/P94・6行)

『而るを汝知らずして、勤苦・憂惱して以て自活を求むること、甚だこれ癡なり』 (一九一頁 終行)

(『この宝石のことを知らず、日々の生活にあくせくし、苦勞したり心配したりして毎日を送っていたとは、本当に愚かなことだ』)

とにかく自分とそなわっている仏性を自覚することが、救いに達する一番の近道であり、それが仏道の本道であります。

・〈願〉は一世のものではない

(P127・終5行/P98・1行)

『一切智の願猶お在って失せず』 (一九二頁六行)

我々の修行は今世だけのものではなく、過去世から来世へと成仏をめざして続いてゆくものなのです。～ 願いを持っていたからこそ、今世こうして遭い難き仏法、特に法華經に遭えることができたのです。

『佛の無上慧を得て 爾して乃ち爲れ眞の滅なりと言う』(一九四頁 三行)

・仏性こそ無価の宝珠

(P139・3行/P107・6行)

われわれは一人残らず**〈仏性〉**を持っているのです。けれども、なかなかそれを自覚できません～現象としてあらわれているこの肉体が自分の本質だと思い込んでいます。心はその肉体に付属しているものと思い込んでいます。ただもう肉体と心を満足させるために、欲望を追って右往左往し、衣食に追われてあくせくします。それが仏性を自覚しないということです。

・縁起の教え

(P141・1行/P108・8行)

森羅万象(しんらばんしょう)、因と縁が結ばれて生じている〈仮のあらわれ〉に過ぎないことを悟ることが、救いの第一歩であると教えられたのです。それがいわゆる『縁起の法則』の教えです。

・自由と創造こそ

(P143・7行/P109・終7行)

特に人間は、～本質すなわち『本当の自分(仏性)』というものを、しっかりとつかみ、心の底に確立しない限り、人間としての**本当の生きがい、生きる喜び**は感じられず、従って**眞の救い**に達したとは言えません。お釈迦さまが**最終的に教えになりたかったのは、～人間の本質は確固とした『不滅の仏性』**であることを、はっきりと悟らせようとなさったわけです。

・生かされているように生きる

(P145・終3行/P111・終4行)

自分の幸せを追い求めるだけでなく、**世のため人のために積極的にはたらき、寂光土を作り出していき、そういう自由自在な活動こそが、我々の本来の姿**なのだと悟るのです。それを悟ることが仏さまと一体になることです。

・あなたも普明如来

(P148・4行/P113・8行)

職場や家庭にひとすじの明るさを与えるようならば、その人は立派な普明如来のひとりであります。(世の中に光明を与え、それぞれの分野で世のためになる**〈価値ある人間〉**になること。そんな人を**〈普明如来〉**というのです)



<授学無学人記品のあらすじ>

【感動した阿難(あなん)と羅睺羅(らごら)が授記を願う】――

【一九五頁 一行】(前の品『五百弟子受記品』で、)五百人という多くの弟子たちに授記し、そればかりか五千起去した者たちや、この法会(ほうえ)の場にはいない未来の者たちへの授記を、魔訶迦葉(まか かしょう)に託される様子を見た**阿難(あなん)と羅睺羅(らごら)**の二人は、心ひそかに思いました。

「もし私たちに授記をしてくだされば、どれほど有り難く嬉しいことか。私たちは」いつもそれを考え続けているのだが」と。

【一九五頁 二行】そこで二人は座から立ち上がり、仏さまの御前(おんまえ)に進み出て額(ひたい)を仏さまの御足(みあし)に付けて礼拝(らいはい)して、こう申し上げました。

「『**世尊、我等(われら)此(ここ)に於て亦分(またぶん)あるべし**』世尊よ、私たちも授記を頂く資格があると存じますが如何でございましょう。私どもは心から仏さまを帰依(きい)いたしております。また天上界・人間界、そして阿修羅(あしゅら)界の人々にも、仏の弟子として知れ渡っている私たちであります。／『**阿難は常に侍者(しやくしや)となって法蔵(ほうぞう)を護持(ごぢ)す**』阿難はいつも世尊のお側(そば)に仕えて、世尊のみ教えをたくさん聞かせていただきました。そして教えの蔵のように多くの教えを記憶し保ち続けております。また羅睺羅

(らこら)は、ほかでもありません。世尊の実の子です。もし私たちに授記をお与えくださるならば、／『我が願(わがい)既(すで)に満(まん)じて衆(しゅ)の望(のぞみ)亦(また)足(た)りなん』 私どもの願いがかなうばかりでなく、多くの人々は、自分たちに授記を頂いたことと同じだと願いがかない、心から喜び満足するものと存じます」と、勇気を出して申し上げました。

【声聞2千人が阿難と羅睺羅同様に授記を願う】——

【一九五頁 終四行】すると二人のその言葉を聞いた学修の最中(さなか)にいる声聞や、すでに学修を終えた声聞たち二千人が一斉に立ち上がり、敬意を表わす作法である右の肩を肌脱ぎしてあらわにし、仏さまの御前(おんまえ)に進み出て、一心に合掌して世尊を仰ぎ見ました。そして、阿難と羅睺羅と「同じ願い」を胸にいだきつつ、傍(かたわ)らに控えました」

【世尊が阿難に対して授記】——

【一九五頁 終二行】【(偈)一九六頁 終二行】世尊が阿難に対して語りかけられます。

「阿難よ。そなたは未来世において仏に成ることができます。その名は『山海慧自在通王如来・せんかいえじざいつおうによらい』と言い、六十二億という諸仏を供養し、仏の教えを護持したのちに最高無上の智慧を完成します。そして二十千万億恒河沙(ごうがしゃ)というはかり知れない数の菩薩を教化し、／『諸(もろもろ)の菩薩等を教化し』 それぞれの菩薩も最高の悟りを得るように教化します。誠にその徳分は偉大であると言えます。その国は『常立勝旛・じょうりゅうしょうばん』と言い、国土は清浄で大地は瑠璃(るり)という宝石で覆(おお)われています。時代は『妙音徧満・みょうおんへんまん』と言い、如来は衆生を愍(あわれ)むがゆえに、寿命は無限に近い無量千万億阿僧祇劫(あそうぎこう)という年月です。その寿命の長さを人々が千万億無量阿僧祇劫という時間をかけて数え上げても、到底数え尽くすことができるものではありません。そして教えが正しく伝わっていく《正法》の期間は、その仏の寿命の倍の長さであり、教えがそれに準じた形で残る《像法》の期間は、《正法》の倍に長さに及びます。そしてこれによってガンジス河の数のごとくの無数の衆生が、／【(偈)一九七頁 四行】『此(こ)の佛法の中に於(おい)て佛道の因縁を種(う)えん』 その仏の教えによって、仏の悟りを得る種子を植え付けられるのです」

【新発意(しんぼち)の菩薩たちの疑問(なぜ阿難に高い授記を与えたのか)】——

【一九七頁 五行】この法会場の場の中には、／『新発意(しんぼち)の菩薩八千人』 仏の悟りを得ようと志を立てたばかりの言わば新米の菩薩たちが八千人いました。そしてこの新発意(しんぼち)の菩薩たちは次のような疑問を抱いたのでした。

「今までに授記された大菩薩でも、この阿難のような素晴らしい記を聞いたことがない。／『何(なん)の因縁あつて諸(もろもろ)の聲聞(しょうもん)是(かく)の如(ごと)き決(けつ)を得(う)る』 なぜ声聞に過ぎない阿難に対して、こんなにも尊く素晴らしい記を授けられたのだろうか」

【阿難に高い授記を与えた理由(阿難の過去世の話)】——

【一九七頁 七行】すると世尊は、／『諸(もろもろ)の菩薩の心の所念(しょねん)を知(しる)しめし

て』 これら新発意(しんぱち)の菩薩たちの心の中で疑念があることを読み取られ、すぐに次のように仰(おお)せになりました。

「諸々の善男子よ。はるか遠い過去世に『空王仏・くおうぶつ』という仏がおられた時、その仏のみもとで私と阿難は、共に仏の悟りを得たいという志を立てていたのでありました。／(『阿難は常に多聞(たもん)を樂(ねが)い、我は常に勤(つと)め精進す』)ところが阿難はできるだけ『多くの教えを聞きたい』と常に願っていたのに対し、私は、聞いた教えを一心に修行し、『常に実践する』ことに務めたのでありました。その違いがあったために、結果的に私の方が早く仏の悟りを得ることができたのです」

【一九七頁 終三行】「しかし阿難は、現世において私の教えをすべて受け止め、良く保ち、しっかりと記憶しておりますが、／(『亦(また)将来の諸佛の法蔵(ほうぞう)を護(まも)って、諸(もろもろ)の菩薩衆を教化し成就せん』)将来においても諸仏の教えを護持し、それによって多くの菩薩たちを教化して仏の悟りへと達せしめるであります。それが阿難の本願にほかなりません。そのために、このように授記したのです」

【授記を得た慶びと、過去世のことを思い出した阿難の感動】——

【一九七頁 終行】仏さまから『成仏の保証』を頂き、自分が仏に成った国の美しさと素晴らしさを伺った阿難は大歓喜し、いまだかつて経験したことのない感動と感謝に包まれました。と同時に、過去世に仕えた無量千万億の諸仏から頂いた教えを、／(『即時に過去の無量千萬億の諸佛の法蔵(ほうぞう)を憶念(おくねん)するに、通達(つうたつ)無礙(むげ)なること今聞く所の如し。亦(また)本願を識(し)んぬ』) たった今、聞いたかのように全ての教えを瞬時(しゅんじ)に思い出すことができました。また過去世において誓願した願いも、ありありと蘇(よみがえ)り、自由自在に振り返ることができたのでした。

【授記を得た阿難のお礼と誓い】——

【一九八頁 三行】すると阿難はお礼と誓いの言葉を、偈(げ)に託して申し上げました。「世尊は誠に有り難きお方であります。私が過去世において無数の諸仏から伺った教えを、今日(こんにち)伺ったかのように思い出させてくださいました。私は今こそ何の疑いもなく、仏の悟りを得る道を迷いもなく安心して歩んで参ります。／(『方便(ほうべん)をもって侍者(じしゃ)となって 諸佛の法を護持(ごじ)せん』)そして方便を以って今後多くも多くの仏の侍者となって、その教えを護持して参ります」

【羅睺羅への授記】——

【一九八頁 七行】その時、世尊は羅睺羅(らごら)に向けて語りかけられました。「そなたも未来世において、必ず仏と成ることができます。名を『蹈七宝華如来・とうしっぽけにょらい』と言い、これから先、十の世界を微塵(みじん)に砕(くだ)いた粒子の数に匹敵(ひってき)する無数の仏を供養し、しかもそれぞれの仏の長子として生まれていきます。まさに現在のそなたと同じであります。この『蹈七宝華仏』の国土の美しさ、そして仏の寿命の長さ、教化する弟子の数、教えが正しく残る『正法』の期間、また『像法』の期間の長さなどは、阿難が仏と成った『山海慧自在通王如来・せんかいえじざいつうおうにょらい』と同じであり、異なるものはありません。／(『亦(また)此の佛の爲(ため)に而(しか)も長子と作(な)らん』)そしてまた仏の長子となって生まれてくるそなたは、さらに修行を積んで行き、

ついには最高無上の悟りを得ることになります」

【釈尊の父親としての慈愛】——

【一九九頁 三行】世尊は偈(げ)を以って、さらにお説き下さいました。

「私が太子であった時、羅睺羅は長子として生まれ、／(『我今(われいま)佛道を成ずれば法を受けて法子(ほうし)と爲(な)れり』) 私が仏の悟りを得ると今度は私の教えを受けて《教えの子》となりました。／(『未來世の中に於て無量億の佛を見たとまつるに皆(みな)其(そ)の長子となって一心に佛道を求めん』) 羅睺羅は未來世においても常に仏の長子として生まれ、一心に仏の悟りを求めていきます。／(『羅睺羅(らごら)の密行(みつぎょう)は唯我(ただわれ)のみ能(よ)く之(これ)を知れり』) そして謙虚になって修行し、人知れず陰で功徳を積みながら精進する姿は、じつは私だけがよく知っています。羅睺羅が私の長子となって生まれながらも、黙々と陰ながら修行精進している姿は、多くの衆生の善き手本であります。そして陰ながら一心に修行するその功徳は、無量億千万という数えきれない甚大(じんだい)な功徳であります。羅睺羅はそのようにして仏道を安らかに歩み、最高無上の悟りを求めて行くのであります」

【二千人の声聞へ授記】——

【一九九頁 八行】「羅睺羅への授記を終えられた世尊は、羅睺羅のそばに居並ぶ学修中の声聞とすでに学修を完了した声聞たち二千人を見渡されました。そして世尊は、それらの者たちの心が、とらわれなく安らかであり、素直で正直で、静かで落ち着き、清らかな心となっていることを感じ取られました。さらにその者たちが一心に仏を仰ぎ見ていることがわかりました。

【一九九頁 九行】そこで世尊は、阿難に対して仰(おお)せになりました。

「汝(なんじ)、これらの学・無学の二千人の声聞を見ましたか」

【一九九頁 九行】阿難は答えます。

「はい。見ました。素晴らしい人たちです」

【一九九頁 九行】世尊は言葉を続けます。

「阿難よ。これら二千人の声聞たちは、五十の世界を碎(くだ)いて微塵(みじん)とした数のように無数の仏をこれから供養し、敬い、尊び、仏の教えをしっかりと護持していきます。そして最後の身において、十方の国々でみな同じ時刻にそれぞれの道場にて坐し、同時に仏と成るでありましょう。仏の名は、みな同じく『宝相如来・ほうそうによらい』と言い、その仏の寿命は一劫の年月であります。その国の美しさとそこに住む声聞や菩薩たちの素晴らしさ、また《正法》と《像法》の期間の長さは、みな同じであります。これら無数の『宝相如来』は、それぞれが持つ偉大なる神通力によって十方世界の衆生を教化し、その名声は十方世界の隅々にまであまねく知れ渡るでありましょう。そしてそれらの仏は、長い年月それぞれの国土においてとどまり、そののち世を去るでありましょう」

【二千人の声聞が授記を得た慶びと感謝】——

【二〇〇頁終二行】この有り難い記を伺った学・無学の二千人の声聞は、躍（おど）り上がりっぱかりに喜び、偈をもって感謝と感激、感動の思いを世尊に申し上げたのでした。

「『世尊は慧（え）の燈明（とうみょう）なり我（われ）授記の音（みこえ）を聞きたてまつりて心に歡喜（かんぎ）充滿（じゅうまん）せること甘露（かんろ）をもって灌（そそ）がるるが如（ごと）し』世尊は偉大なる智慧の《光》であります。私共への有り難い授記の御声を直接伺い、私たちは歡喜に満ち満ちています。まるで甘露を全身に浴びたようで、これ以上ない幸せに包まれています。本当にもったいないことです。本当に有り難いことです」と世尊を心から讃え、感謝と感激を申し上げたのでした。



がくむがく しょうもん じゆき 学・無学の声聞への授記

(P149・終行/P115・終4行)

見習いの修行者までも授記されたということは、一見、不思議なようですけれども、すべての人間は等しく「仏性」を持っているのであり、その仏性を明らかにし、自覚さえすれば、だれでも等しく「仏に成れる」のです。

みぢか きょうけ 身近な人の教化

(P152・5行/P117・6行)

ここで不思議に思われることは、阿難や羅睺羅がなぜほかの人よりずっと遅れて、ようやく見習いの声聞たちと一緒に授記されたかということです。～我々が身近な者、すなわち妻とか夫とか、子とか親とかを教化することが、一番難しいのだということになります。口先だけで導こうとしても、到底できるものではありません。日常生活の、実際の行ないによって感化するよりほかはないのです。

《急い催ひのひととき ①》

庭野開祖は、「身近な人を教化するには、口先だけで導こうとしてもできるものではなく、日常生活のなかで、実際の行いによって感化するよりほかはない」とご指導くださっています。

——では、私たちの日常生活は、どのような日常生活を送っているのでしょうか？特に自分の素（す）、本性、わがままが一番出やすい『家庭』では、どんな「行ない」をしているのでしょうか？同様に、家庭ばかりでなく『職場や学校』では、周囲にどのような影響を与える行ないをしているのでしょうか？振り返ってみましょう。

じょうずい じしゃあなん 常随の侍者阿難

(P153・終4行/P118・4行)

阿難（アーナンダ）は、浄飯王（じょうほんのう）の弟・甘露飯王（かんろほんのう）の子で、つまりお釈迦さまの従弟（いとこ）にあたります。提婆達多の弟でもあります。～阿難は百二十歳の長寿を保ち、火定（かじょう）三昧にはいって示寂（じじゃく）したと伝えられています。

みつぎょう 密行第一の羅睺羅

(P166・1行/P126・終7行)

羅睺羅(ラーフラ)というのは、障(さわ)りという意味です。シッダールタ太子が正法を求めのために出家したいと、ひそかに思っていたころ、王子誕生の報をきかれ、おもわず「ラーフラ(障)が生じた」とつぶやかれたといひます。～自分の生まれや身分を鼻にかけることなく、常にコツコツと陰徳を積み、静かに坐禅することをつねとしましたので、ついに、《密行(みつぎょう)第一》として、教団内外の信望を集めるようになりました。

『世尊、我等此に於て亦分あるべし』 (一九五頁 三行)

世尊よ。私どもも成仏の保証を頂く資格があると存じますが。如何でございましょう。

『我が願既に満じて衆の望亦足りなん』 (一九五頁 六行)

授記を頂けるならば、私どもの願いがかなうばかりでなく、多くの人々も自ら授記を頂いたことと同じだと感じ、願いがかなって心から満足し喜ぶものと存じます。

《息帷のひととき ②》

阿難と羅睺羅は『世尊、我等此に於て亦分あるべし』(「世尊よ。私どもも成仏の保証を頂く資格があると存じますが、如何でございましょう」と勇氣を出して世尊に申し上げます。しかも、『我が願既に満じて衆の望亦足りなん』(「もし私たちに授記をお与えくださるならば、多くの人々は自分たちに授記を頂いたことと同じだと、願いがかなうばかりでなく、心から喜び満足するものと存じます」と堂々と言いつつ切っています。

——この堂々と言いつつ切った「勇氣ある行為」を、あなたはどのように受け止めますか? 噛み締めてみましょう。

『此の佛法の中に於て 佛道の因縁を種えん』 (一九七頁 四行)

仏の教えによって、仏の悟りを得る種子を心身に植え付けることでありましょう。

『何の因縁あつて 諸の聲聞是の如き決を得る』 (一九七頁 六行)

声聞の身に過ぎない(阿難)が、なぜこのような素晴らしい授記を得たのであろうか。

『爾の時に世尊、諸の菩薩の心の所念を知しめして』 (一九七頁 七行)

世尊は、(新発意の)菩薩たちが心の中に感じた不審をお分かりになりました。

『阿難は常に多聞を樂い、我は常に勤め精進す』 (一九七頁 終四行)

阿難はできるだけ多くの教えを聞き、学びたいと願ひ、一方、私は聞いた教えを一心に修行し、実践することに務めたのです。

この節には、ひじょうに大切なことが教えられています。それは『実践の重要性』ということ。～

阿難の前身である菩薩は、仏さまの教えをできるだけたくさん聞きたい、教わりたいと願っていたのに対して、お釈迦さまの前身である菩薩は、教えを修行し、実践することに務められたわけです。その違いによって～

お釈迦さまの方がずっと早く仏の悟りを得られたのであります。～

仏道を励むのには次の三つの道を兼ね行なわなければならぬとされています。

⇒ **聞(聞解)**(学習) **思(思惟)**(思索) **修(修習)**(実践)。

修習には『**自利の実践**』と『**利他の実践**』があります。

『**自利の実践**』は、自分に磨きをかける修行。礼拝・読経・三昧もそれに入ります。

『**利他の実践**』は、仏さまのお仕事のお手伝いであり、人のために法を説いたり、導いたり、縁ある人を人生の苦悩・困難から救ってあげるはたらきもそれに入ります。

《**思惟**のひととき ③》

前世で阿難は「**法を聞く・多聞を願う**」、一方、お釈迦さまは、「**つとめて精進する**」という姿勢をとられていたと説かれています。――

①では、私の信仰姿勢は、どちらのタイプでしょうか？

それとも、どちらでもない？

②また、『**実践**』には、「**自利の実践**」と「**利他の実践**」の両方を行なうことであると説かれています。私はこの「**自利の実践**」と「**利他の実践**」の両方を務めているでしょうか？ 振り返ってみましょう。

慈悲を習慣とする

(P191・終5行/P147・3行)

利他行は、単に慈悲心のほとばしりであるばかりでなく、慈悲心を養うものであります。～ 絶えず善行(ぜんこう)を行っていると、だんだん情緒(じょうちよ)が美しくな
っていき、～ ますます善行を行わずにはいられないようになるのであります。

利他行は智慧も養う

(P192・5行/P147・終5行)

「慈悲の行ない」は、利他行であると同時に、ほんとうの意味の智慧を養う自利の修行ともなります。

利他行を行なえば行なうほど、仏さまの慈悲に近い「慈悲」、仏さまの智慧に近い「智慧」が、次第次第にできあがっていくわけであって、《法の実践》が仏の境地への一番の近道であり、お釈迦さまも、それによって、阿難よりも早く悟られたのです。

《^{しゆい}慧惟のひととき ④》

庭野開祖は「『慈悲の行ない』を實踐していけば、「だんだん情緒が美しくなる」と説かれ、次第に『仏の智慧と慈悲』を頂けるのです」とお教えてください。

しかも、「仏の智慧と慈悲」を具えることができれば、それによって、人として最高の境地、すなわち「満ち足りた幸せな人生」を送ることができるということもお教えてください。

—— この「『慈悲の行ない』をする」ことによって、「情緒が美しく」なり、『仏の智慧と慈悲』を得て、最終的には、「満ち足りた人生を送れる」ということ、あなたはどのように受け止めますか？ 噛み締めてみましょう。

『^{ほうべん}方便をもって侍者となつて ^{じしや}諸佛の法を護持せん』 (一九八頁 五行)

方便をもって今後も多くの仏さまの侍者となり、その教えを護持してまいります。

^{きやうけ}教化とは ^{ぶつしやう}仏性を ^ひ引き出すこと (P193・4行/P148・5行)

《教化し成就せん》・・・仏性が完全に動き出した状態が《成就》であり、ひとの仏性を完全に引き出してあげることを、《成就せしめる》というのです。

《^{しゆい}慧惟のひととき ⑤》

庭野開祖は、『教化』とは相手の人が持っている『仏性』を引き出してあげることだと説かれてます。

—— では、私は「相手の仏性を引き出そう」としている自分なのか？ それとも「相手の仏性が出ることを引き止める」触れ方をしてはいないか？ (裁いたり、咎めたり、追い詰めたりしてはいないか？) 振り返ってみましょう。

『^{ほう}法を受けて ^{ほうし}法子と為れり』 (一九九頁 三行)

私の教えを受けて、教えの子となりました。

^{ほう}法の子をつくらう (P203・5行/P157・2行)

我々もお釈迦さまの遺産相続者とならなければなりませんし、また、その遺産をできるだけ多くの人に伝えなければなりません。すなわち、自ら立派な《法子(ほうし)》となると同時に、この世に《法子》を無限に増やしていかなければならないのです。

『羅^ら睺^ご羅^らの密^{みつ}行^{ぎょう}は唯^{ただ}我^{われ}のみ能^よく之^{これ}を知^しれり』

(一九九頁 五行)

羅睺羅は謙虚に修行し、人知れず陰で功徳を積みながら精進する姿は、実は私だけがよく知っています。

密^{みつ}行^{ぎょう}

(P205・終行/P159・1行)

第一に、どんな小さな戒律でも、また人の見ていないところでも、それを固く守り行っていることです。第二は、本来、菩薩の身でありながら、それをかくして声聞として活動することです。

《^し怱^{かい}のひととき ⑥》

庭野開祖は『密行』の意味を

- ①「人の見ていないところでも、ちゃんと実践していること」
- ②「菩薩行を実践していても、それを表にひけらかすようにしていないこと」と お教えくださっています。 — では、この「①と②」の在り方と、日ごろの自分の信仰姿勢を振り返るとどうであるか？ 振り返ってみましょう。

《^し怱^{かい}のひととき ⑦》

お釈迦さまは、実子・羅睺羅に対して「そなたが陰で行う修行を、私はしっかり見ていた」と説かれています。 — では私は、私にとって大切に身近な「夫・妻・子」、または「僧伽の仲間たち」などの人たちの「陰の努力」を見るように努力しているのでしょうか？ また、見ているのでしょうか？ 振り返ってみましょう。

『世尊^えは慧^{どう}の燈^{みょう}明^{なり} 我^{われ}授^{じゆ}記^きの音^{みこえ}を聞^ききたてまつりて 心^{こころ}に歡^{かん}喜^ぎ充^{じゅう}滿^{まん}せるこ

と 甘^{かん}露^ろをもつて灌^{そそ}がるるが如^{ごと}し』

(二〇一頁 一行)

世尊は智慧の光であります。私どもは授記のみ声を伺いまして、心に慶びが満ち満ち、甘露を注がれた思いでございます。

《^し怱^{かい}のふいかえい まとめ》

今日の『授学無学人記品第九』の学びを通して、何を学び取ったか？
(何を一番強く感じ、受け止めることができたか？) 噛み締めてみましょう。

合 掌